

境界に位置するIdentities
 —グロリア・アンサルドゥーアの *Borderlands / La Frontera: The New Mestiza* を通して—

吉原令子

Identities in Borderlands
 —*Borderlands/La Frontera: The New Mestiza* by Gloria Anzaldua—

Reiko Yoshihara

Abstract

In writing about her childhood along the Texas-Mexico border, Gloria Anzaldua describes the experience of being caught between two cultures, as being an alien in both. The actual physical borderland that Anzaldua describes in *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza* is the Texas-U.S. Southwest/Mexican border, but the "borderlands" she refers to are something more psychological, sexual, and spiritual. These Borderlands are present wherever two or more cultures confront each other, where people of different races occupy the same territory, where all socio-economic classes touch, and where the confusion of sexual and gender identity exists. Her preoccupations with the inner life of the Self, and with the struggle of that Self in the borderlands provide the unique positioning consciousness. The quest for one's identity based on race, gender, sexuality, class, nation, etc., ends up in the system of binary oppositions. In my view, in this book Anzaldua criticizes an absolute despot duality that says we are able to be only one or the other and insists that the Self is plural, transformative, and performative. She searches for a way of balancing, and mitigating the system of binary oppositions through knowing and learning the history of oppression. Anzaldua suggests that we should accept our differences and that our differences should open political lines of affiliation with other groups to challenge the specific forms of domination that we share in common.

1. 問題の所在

フェミニズムはいったい誰のものなのか。いや、誰のものだったのか、そして誰のものになろうとしているのか。フェミニズム運動の歴史を振り返ると、「白人至上主義」や「女性間の差異の隠蔽」といった言葉が深く影をおとしている。「第一波」「第二波」という時代区分にとどまらず、女性解放の運動を広げるために女性同士が結束する必要性、つまり、シスターフッドの重要性を唱えたとき、こうした「女性」の中に白人女性、経済的にめぐまれた女性、異性愛の女性だけでなく、有色人種の女性、同性愛の女性、労働者階級の女性、貧困にあえぐ女性、障害をもった女性、歳をとった女性は含まれていなかった。「シスターフッド」が周縁のそのまた周縁に追いやられた女性たちの状況を理解した上で主張されたものでないならば、フェミニズムは単に権力志向の運動にすぎなくなってしまふ。

ジェンダーの知を枠組みとするフェミニズムは、人種、民族、階級、セクシュアリティ、年齢、などを軽視する傾向があった。これはフェミニズム内部で軽視された属性をもつ女性たちを下位に位置づけてしまうヘゲモニー的構造が存在していたことを意味する。このような重層的な差別構造を指摘し、「女性」だからといってみんな同じ地平線上に立っているわけではないと「一枚岩的なアイデンティティ」を批判したのがベル・フックス (bell hooks)、バーバラ・スミス (Barbara Smith)、グロリア・アンサルドゥーア (Gloria Anzaldua) といった women of color¹ である。

アンサルドゥーアは「メキシコ人を祖先にもつテキサス生まれのチカナ・レズビアン・フェミニスト詩人であり、フィクション作家である」と自己定義する。スペイン系白人の血をひく父とメキシコのインディアンの血をひく母との間にテキサス南部で生まれる。父が小作人であったということもあり、彼女はフェミニズム運動だけでなく移民の農場労働者運動にも活発に携わっている。彼女の代表作でもあり処女作でもある著書『ボーダーランド (Borderlands/La Frontera: The New Mestiza)』は英語とスペイン語の二か国語で書かれたテキストであり、彼女自身がその一部であったメスチゾ (mestizo)² たちの社会、歴史、文化などのさまざまな生の断面を描くことで、ボーダーランド (borderland) とは何か、そして二つもしくはそれ以上の文化や領域で同時に生きるとはどういうことなのかを追求した作品である。これ以外に、アンサルドゥーアは『背中と呼ばれるこの橋 (This Bridge Called My Back: Writing by Radical Women of Color)』や、その続編である『顔をつくる、魂をつくる (Making Face, Making Soul)』の編者としても

名をはせている。また、『プリエティタは友だちがいる (*Prietita Has A Friend/Prietita tiene un amigo*)』という英語/スペイン語のバイリンガルで書かれた絵本の作者でもある。チカノ・スタディーズ、フェミニスト・スタディーズ、クリエイティブ・ライティングをテキサス大学、サンフランシスコ州立大学、ノーウィッチ大学、カリフォルニア大学サンタクルーズ校で教鞭をとった経歴をもつ。

アンサルドゥーアは自らを「ボーダーウーマン (a border woman)」³ であるという。この境界とは彼女が生まれたアメリカ合衆国とメキシコの国境地帯だけを意味しているわけではない。それは、二つもしくはそれ以上の文化が混在する状態であり、そのボーダーランドに生きることを通して彼女は本質的なアイデンティティではなく、もろもろの差異や交錯からなり変動する構成体としてのアイデンティティを構築していく。それは決してとどまることを知らず、構築、破壊、再構築が繰り返されるものである。本稿の目的は、アンサルドゥーアの作品群を通して彼女が同一性としてのアイデンティティの脱構築を試み、政治意識を基底とした連帯を導きだそうとした作家であることを検証することである。そして、彼女がヘゲモニー構造や言説の中で、語ることの問題性を認識しながらも語るこの意味を探求し続ける作家であることを明らかにしていきたい。以下の三つの視点から分析を試みる。

まず始めに、境界とは何か、そして、境界を生きるとはどういうことを意味しているのかを考えたい。それは、作家としてアンサルドゥーアが誰に向かってどこから語っているのかという問いと関連している。次に、均一化された「女性」を想定することに対して異議を唱えるアンサルドゥーアのアイデンティティの概念を考察する。固定的で単一的なアイデンティティからハイブリッドなアイデンティティを主張するようになったフェミニズム運動内の背景をふまえながら、なぜハイブリッドなアイデンティティを主張することが重要なのかを考える。最後に、ポストコロニアル・フェミニスト批評家の言説を参考にしながら、アンサルドゥーアが語るものと語られるもののヘゲモニックな関係を明らかにしながら、語りの中に連帯を想起する力があることを私たちに教えてくれる作家であることを明らかにしたい。

2. 境界を生きる / 境界のポリテックス

境界という概念は地理的、政治的、行政的な意味を兼ね備えた国境に局在化すると同時に、これまで長い間にわたり、社会的諸階級に応じて諸個人を差別化 =

区別化する役割も果たしてきた。権力者が境界を差別と選別の装置として利用してきたことはあらゆる歴史をみても明白である。しかし、この静止し動き出すことがないと思われていた、二項対立的図式を正当化する境界の概念を覆そうとしているのがアンサルドゥーアである。彼女は境界線と境界地域（ボーダーランド）についてこう語る。

Borders are set up to define the places that are safe and unsafe, to distinguish us from them. A border is a dividing line, a narrow strip along steep edge. A borderland is a vague and undermined place created by the emotional residue of an unnatural boundary. It is in a constant state of transition. ⁴

（境界線は安全である場所とない場所を区別するために、そして私たちと彼／彼女らを区別するために存在している。境界線は区別する線、鋭い刃に沿った細い線である。ボーダーランドは不自然な境界にある感情的残存物によってつくられた曖昧ではっきりとしない場所である。それは絶えず変遷が繰り返される状態の中にある。）

アンサルドゥーアは、ボーダーランドは曖昧ではっきりとしない領域、つまり、重層的かつ変動的な領域であるという。このようなボーダーランド領域では、境界線が自己増殖を繰り返し、ボーダーランドの領域がますます拡大されていくような状況を想定することができる。アンサルドゥーアはメキシコからの不法移民女性を例に語る⁵。国境という境界線を越えた瞬間、メキシコの女性が直面する現実には性差別と貧困の中で生死をさまようことなのだという。密航仲介業者にレイプされる女性、業者に騙され売春宿に売り飛ばされる女性、週に15ドル以下でメイドとして働かされる女性の状況を描く。そこから逃れたくても英語がわからなかったり、強制送還を恐れて救援センターに駆け込むこともできない彼女たちは孤立を余儀なくされ、自分がいる状況を把握する手段からも逃げ出す手段からも遠く離れたところにいるのだ。それは一本の境界線を越えると、また同じ地点にもう一本の境界線が立ち現われるようなものである。

また、ボーダーランドでは旧来の境界線を横切り乗り越えるような新たな境界線の現出も想定しなければならない。たとえば、カリフォルニア州の住民提案187号⁶はポリシング（治安取り締まり）を遂行する境界が増殖していることの良い例であろう。この住民提案187号は、不法移民に対する教育や、急患以外の医療、福祉関係の補助金支給を禁止するのがその主な内容である。アメリカ合衆国はネイティブ・アメリカン以外は移民とその子孫によって形成されてきた国家で

ありながら、古参の移民が新しい移民を排斥する法律を今まで何度もつくってきた⁷。古参の移民は治安の悪化や経済的不景気を新移民のせいにしがちな風潮があり、そのような背景がこの住民提案187号を生み出したといえる。住民提案187号のように、境界線が向こうから迫ってくるようなこともある。

このような諸境界線の複数化、再構成、新たな境界線の現出を孕む領域で生きることは、アイデンティティの流動性や重層性も余儀なくされるのではないだろうか。アンサルドゥーアは境界を生きることを以下のよう表現している。

Living on borders and in margins, keeping intact one's shifting and multiple identity and integrity, is like trying to swim in a new element, an "alien" element.⁸

(境界、周縁を生きることは、流動的重層的なアイデンティティの集合を無傷のままにしておき、新しい要素、「異質な」要素の中を浮遊しようと試みるようなものである。)

アイデンティティは水平面を隣合わせになって浮いているようなものでもなければ垂直にランクづけされたものでもない。アイデンティティは新たな他者との関係性において拡大し自己増殖を促されるのである。つまり、アンサルドゥーアにとってボーダーランドで生きるということは、単一の、同一性のアイデンティティを越えて、同一性と差異性が交錯する場で生きることであり、二つないしはそれ以上の領域に同時に属するというような境界的な場で生きることを意味している。このアイデンティティ論については次の章で詳しく述べることにしたい。

アイデンティティが流動的で重層的だからといって、発話の位置も移動するわけではない。何かをいうためにはどこかに自分を位置づける必要があり、位置性を欠いた発話は存在しない。著述家であり詩人であるアンサルドゥーアにとって発話とは書くことである。「書く」という行為の実践的意味を考えると、オリジナルのテキストが何語で書かれているかということは重要なことなのだが、それが英語とスペイン語(チカノ・スパニッシュ)で書かれているからといってチカノ・アメリカンに向かって書かれているというのは安直すぎるだろう。では、彼女はいったいどこから誰にむかって何を語っているのか。彼女の発話の位置は、抑圧する者と抑圧される者、システムへの迎合とシステムの攪乱、内面化と暴露が入れ細工のように交錯するボーダーランドであり、彼女が語りかける相手はボーダーランドの住人なのである。

Los atravesadas live here: the squint-eyed, the perverse, the queer, the troublesome,

the mongrel, the mulato, the half-breed, the half dead; in short, those who cross over, pass over, or go through the confines of the “normal.”⁹

(越境する人々がここに住んでいる。偏見をもった人、正道をふみはずした人、クエア、やっかいな人、混血の人、ムラート(白人と黒人の混血の人)、白人とネイティヴ・アメリカンの混血の人、半分死にかけているような人たちである。つまり、「ノーマル」という境界線を乗り越えたり、渡ったり、通過したりする人々である。)

「越境する人々」とは抑圧する側の文化と抑圧される側の文化を内在化しながら、何らかの形で権力から排除された経験をもつ人々ではないだろうか。「ノーマル(普通)」という境界を越えたとき、そこは「アブノーマル(普通ではない)」な世界が広がる。アメリカ社会において普通ではないとはどういうことなのか。性/ジェンダー、人種、性的指向の視点からみれば、男性であり白人であり異性愛であることが普通であり、それ以外は「アブノーマル」な世界の住人ということになる。「アブノーマル」な体験は多様であり同一的なものではないかもしれない。しかし、たとえ抑圧の体験が同一のものでないとしても、アンサルドゥーアが「私たちはみんな同じ抑圧をもっているわけではないが、他者の抑圧に共感を感じアイデンティティファイすることができる」¹⁰と語るように、排除された経験は共感を呼び自らの体験と重ねあわせることができる。他者の中に自分自身をみるのである。ポードーランドはさまざまな差異が交錯する場であると捉えることによって、抑圧された者同士の政治的ラインが開かれていることをアンサルドゥーアは私たちに教えてくれる。

次の章では、差異を露にすることによって抑圧された者同士の政治的ラインが開かれていることをアンサルドゥーアのアイデンティティ論を考察することによってより明確にしたい。

3. アイデンティティ (Identity) からアイデンティティズ (Identities) へ

アイデンティティという概念がフェミニズムの中でなぜ有益な概念になったかといえば、私的関心と政治的関心との間の柔軟な接続を可能にしたからである。シモーヌ・ド・ボヴォアール (Simone de Beauvoir) が『第二の性(*The Second Sex*)』を書き始めるにあたって、「私は自分を定義したいと思えば、まず真っ先に『私は女である』と言わなくてはならない。それから先の議論が、すべてこの一点の真実に根拠をおいているからなのだ」¹¹と語る。この主体性としてのアイデ

ンティティは「女性」であるという同一性のアイデンティティを導き、ジェンダーという分析枠組みを提供した。このジェンダー概念は男女の力関係を明らかにし、家父長制という概念を発見した。これはフェミニズム批評の特徴のひとつであり、ラディカル・フェミニストの主張「私的なことは政治的なこと」の根源をなすものである。「女性」であるという同一性としてのアイデンティティを強調することによって女性同士の連帯を呼びかけ、その結果、フェミニズム理論は政治的に機能し、政治的文化を変容させ、政治的思考を拡張した。しかし、現在、この意義は認めるにしろ、被抑圧者としての「女性」を一元的に定義することは困難であり、「女性」であることを唯一の根拠として女性の連帯を呼びかけることは不可能であろう。だからといって、私はアイデンティティという概念が無用の産物だと考えているわけではない。私は同一性としてのアイデンティティと主体性としてのアイデンティティは区別して考えるべきではないかと思っている。そして、同一性意識からではなく、政治意識から想起される連帯をアンサルドゥアの『ボーダーランド』から読み取りたい。

「女性」であるという同一性としてのアイデンティティを強調することは、多種多様な女性を単一の「女性」というカテゴリーの中に一括することで、女性間の差異を見えなくしてしまうことである。今までのフェミニズムの歴史を振り返って、最初に「女性」というカテゴリーに異議を唱えたのは黒人女性であった。19世紀から20世紀初頭にかけて女性参政権獲得運動が高まる中、ソジャーナ・トゥルース (Sojourner Truth) は1851年に「私は女ではないのか? (Ain't I a Woman?)」というタイトルで一般的には知られている有名な演説をおこなっている。

あそこの殿方はあの婦人が溝の上を通る時は抱きかかえなきゃならない、どこであろうと一番いい場所を通さなきゃならないとおっしゃる。だけど私は馬車に乗る時でも、ぬかるみの中を通る時でも、一度だって手を貸してもらったことはないんです。一番いい場所を空けてもらったこともないんです。だからって私が女じゃないと言うのか。私をごらんください。私の腕をごらんください。私は畑を耕し、種をまき、納屋に取り入れる。どんな男だって私にはかなわない。だからって私が女じゃないと言うのか。¹²

トゥルースはヴィクトリア朝的な白人女性とは決定的に違う自分の立場を述べる。私たち読者はトゥルースの演説から白人女性と黒人女性は決して同じ「女性」ではないことを読みとることができる。

トゥルースの演説から100年以上が経った1963年にベティ・フリーダン (Betty

Friedan) が『新しい女性の創造 (The Feminine Mystique)』を発表したとき、そのフェミニスト言説や実践から排除されていると異議と唱えたのはレズビアン・フェミニストや黒人フェミニストたちであった。フリーダンは郊外に大きな家を持ち、良き夫、子供にも恵まれ、一見、何不自由ない生活をしている主婦が「名づけられぬ悩み」に苦しんでいることを発見し、彼女の著書は第二波フェミニズム運動の起爆剤ともなった。しかし、フリーダンを中心として結成されたNOW (全米女性機構) はレズビアンを「ラベンダーの脅威」と呼び露骨に彼女たちをNOWから排除した。また一方、「名づけられぬ悩み」に苦しむ中流階級の白人女性たちが社会的自立を求めて家の外に働きに出て行ったとき、白人家庭の家事、育児をまかされたのはメイドとして雇われた黒人女性たちであった。バーバラ・スミス (Barbara Smith) は評論「黒人フェミニズム批評に向けて (Toward a Black Feminist Criticism)」で女性解放運動内部に存在する人種差別主義に対して止めどのない怒りを次のように表している。

……心胆を寒からしめるものは、これを読む女性の多くが、彼女らの読みもの、彼女らの政治、あるいは彼女らの生活のなかに、われわれ黒人女性がいけないということに、いままで気づきもしなかったという認識である。表向きのフェミニストたちや定評のあるレズビアンたちが、白人女性以外の女性がいることの意味にこれまで盲目であったということ、そして自分たちのなかにあってこの盲目の源泉ともなっている深い人種差別主義を相手に、いまなお戦わねばならぬということは、実に腹立たしい¹³。

文化・経済的支配体制の下で幾重にも重なる複雑な抑圧にさらされてきた黒人フェミニストたちは、性/ジェンダー、人種、階級のすべての面において被抑圧者なのであり、どれかひとつを選択したり特権化することはできないのである。黒人女性や有色人種の女性たちにとってはアイデンティティを単一的に捉えることは不可能であり、自分たちの立場をより明確に表現するためにはそれをさまざまな差異が交錯する場として捉えることのほうが有効であった。性/ジェンダー、人種、階級、性的指向、民族、年齢、身体的障害などという概念がアイデンティティの構成の一部を担うという考え方は、それまで性/ジェンダーを単一のアイデンティティと考えていたフェミニズム理論に新風を吹き込むことになった。そして、「女性」であるという同一性意識から想起される連帯の終わりでもあった。

さらに、このアイデンティティの概念はポスト構造主義の考えと相まってますます広がりを見せる。ポスト構造主義はファロス ロゴス中心主義を批判をする

ことによって二項対立的なものを切り崩そうとした。従来のフェミニズム理論は近代の枠組みの中で、男性／女性、白人／非白人、異性愛／同性愛、主者／他者、中心／周縁といった二項対立的思考が永く温存され、女性・有色人種・同性愛者をひたすら犠牲者とみなしがちであった。既に「女性」であるという単一的、同一的アイデンティティに疑念を感じていたフェミニストたちがアイデンティティの多様性、つまりは、「アイデンティティズ」を打ち出すポスト構造主義的アプローチを取り入れるのに長い時間はかからなかった。このような状況の中で提供されたアイデンティティの概念にきわめて斬新な主張を打ち出しているのがガヤトリ・C・スピヴァク（Gayatri C. Spivak）、トリン・T・ミンハ（Trinh T. Minh-ha）、レイ・チョウ（Rey Chow）などの第三世界出身のフェミニストたちである。彼女たちの共通点は旧来のアジア系移民とは異なり、エスニック・コミュニティへの帰属意識が薄いことである。それは、バイリンガルあるいはトリリンガルの知識人として世界を移動し、越境を繰り返すディアスポラとしての体験が要因のひとつであろう。ディアスポラとしての越境的体験は当然ながら彼女たちのアイデンティティ概念にも影響を与え、根無し草的で流動的なアイデンティティを表現させるに至っている。ポストコロニアリズム、ポスト構造主義、ポストモダニズムからのさまざまな要求がフェミニズムにおけるアイデンティティの概念をその偏狭的な性／ジェンダーを優先する視点から脱中心化していったといえる。

では、アイデンティティについて語るとき、「女」というカテゴリーはもう必要ないのか。スピヴァクはフェミニズムを語る場合、暫定的に「女」というカテゴリーが必要なことを認めている。

前進を続けるために、ある立場をとることを可能にするため、そういう定義は必要だと感じている……私は女として自らの定義を構築するが、それは、女がもっているとされる本質によってではなく、広く一般に使われている言葉によって行われる¹⁴。

これはフェミニズム理論がジェンダーに特権的な意味を与えるということとは意味を異にする。女性の自己像はさまざまな社会的要因との関係において想起されるものであって、ジェンダー概念からのみ想起されるものではない。たとえ最初はジェンダー概念から想起されたものであったとしても、それを上位に置き、人種、民族、階級、性的指向、宗教、年齢などの概念を下位に置くことは差異の隠蔽であり、より多くのものを包括しようと試みるフェミニズム理論とは相反するものである。ジュディス・バトラー（Judith Butler）がフェミニズム理論におけ

る「ジェンダー主体の脱構築」を展開する理由はここにある。

もしもひとが女で「ある」としても、それがそのひとのすべてでないことは確かである。その語がすべてを包摂することができないのは、ジェンダー化されるまえの「ひと」が、そのジェンダーの成り立たせている装具一式を超えたものであるからではない。そうではなくて、異なった歴史的文脈を貫いてジェンダーがつねに一貫して矛盾なく構築されているわけではないからであり、またジェンダーは、人種、階級、民族、性、地域にまつわる言説によって構築されているアイデンティティの様態と、複雑に絡み合っているからである。その結果、ジェンダーをつねに生みだし保持している政治的および文化的な交錯から「ジェンダー」だけを分離することは不可能なのである¹⁵。

バトラーがジェンダーによって女性をひとつのコミュニティと認識することに反対するのは、それが一種の同化概念だからである。「総称的な女性」を規定し、性的帰属を同じくするということをもって自動的に女性の経験を社会固有の現実であり真実であるというなら、それ自体が同化主義であろう。「女性」という単一的で固定的なアイデンティティを求めることをあきらめることは、女性同士の連帯の結束を失うことではない。女性であるということの意味が拡大することによって、性/ジェンダーを越えた、政治的課題の共有において結ばれる連帯を探求できることを意味している。以上のことを、アンサルドゥーアのアイデンティティの概念を検証することによって明らかにしていきたい。また、その際、彼女が二項対立的論理の脱中心化を試みている点にも注目したい。

アンサルドゥーアは自らのレズビアンというアイデンティティを「ハーフ・アンド・ハーフ」という言葉を用いて表現する。男性/女性という性差を越えるために、相対する二つのものを内在化させることによって、二項対立的図式からの解放を図る。

Contrary to some psychiatric tenets, half and halves are not suffering from a confusion of sexual identity, or even from a confusion of gender. What we are suffering from is an absolute despot duality that says we are able to be only one or the other. It claims that human nature is limited and cannot evolve into something better. But I, like other queer people, am two in one body, both male and female. I am the embodiment of the hieros gamos : the coming together of opposite qualities within.

(心理学的な説とは反対に、ハーフ・アンド・ハーフはセクシュアル・アイデンティティの混乱、あるいは、ジェンダーの混乱に悩むことがない。私たちが悩んでいるのは、主者なのか他者なのかという絶対的二元論である。人間には限界があり、よい方にだけ包含することはできない。しかし、私は他のクイア同様、ひとつの身体の中にふたつのもの 男と女 を混在させる。私は聖なる黄鹿の化身 相対するものを内在化したもの である。)

彼女がいうように、私たちを悩ませているものは絶対的二元論である。しかし、差異を主張していればそれで安心というわけにはいかない。差異を主張するとき、に陥いりがちな過ちは、二者択一的な方式で「あなたはどちらを選ぶのか(優先させるのか)?」といいよる態度である。二項対立的な考えから生まれる差異は、権力を不平等に配分するカテゴリーとし利用される。この論理は常に最初のを優位におき後者を従属させるので、周縁のそのまた周縁に追いやられた者たちをまたあらたな差異のゲッターに封じ込め、二項対立的図式を再生産してしまう。二項対立的図式から生まれた差異は新たな他者を生産するだけで細分化、分離主義を助長するものにすぎない。このような不毛な論理からの脱中心化を図るアンサルドウーアはアイデンティティの重層性、複数性、雑種性を説く。

Being lesbian and raised Catholic, indoctrinated as straight, I made the choice to be queer (for some it is genetically inherent). It's an interesting path, one that continually slips in and out of the white, the Catholic, the Mexican, the indigenous, the instincts. In and out of my head. It makes for loqueria, the crazies. It is a path of knowledge — one of knowing (and of learning) the history of oppression of our raza. It is a way of balancing, of mitigating duality.¹⁶

(レズビアンであり、カトリック教徒として育てられ、異性愛主義を教え込まれたが、私はクイアになることを選択した。一部の人には生まれたときからクイアの人もいる。白人、カトリック教徒、メキシコ人、土着の人、本能的な人の世界を絶えず出たり入ったりすることは興味深いことである。正気と狂気。それは狂人のためにある。それは知の道である。私たちの民族の抑圧の歴史を知ること、学ぶことである。それは二元性を緩和する、バランスをとる方法である。)

次の引用文はアンサルドウーアのエッセイ「浅黒い人々(La Prieta)」からであるが、アイデンティティの複数性をより明確に表現している。

You say my name is ambivalence? Think of me as Shiva, a many armed and legged body with one foot on brown soil, one on white, one in straight society, one in the gay world, the man's world, the women's, one limb in the literary world, another in the working class, the socialist, and the occult worlds. A sort of spider woman hanging by one thin strand of web.¹⁷

(あなたは私の名前をアンビバレンスというのかしら。私は何本もの手足をもツシバである。一本の足は茶色い土地(チカノ)にあり、他の足は白い土地(白人)にあたり、異性愛者の社会にあたり、同性愛者の社会にあたり、男の社会にあたり、女の社会にあたりする。また、ある手は文学世界にあたり、労働者階級にあたり、社会主義にあたり、オカルトの世界にあたりする。一本の細い蜘蛛の糸にぶら下がっている蜘蛛女のようなもの。)

アンサルドゥーアが追求しているアイデンティティは、性差はもとより、人種、民族、階級、性的指向といったさまざまなカテゴリーを横断する、多様で開かれたハイブリッドなアイデンティティである。彼女は二項対立的図式を打破するために、男/女、白人/有色人種、異性愛/同性愛、英語/非英語、資本家/労働者、資本主義/社会主義といった対立物の狭間に立ち、その境界線を曖昧にする。

また、アンサルドゥーアは二項対立的な論理を脱中心化するために、アイデンティティを「変換の行為主体(an agent of transformation)」¹⁸とも表現している。バトラー的ないい方をすれば「パフォーマンスなアイデンティティ」ということになるかもしれないが、人間の行為主体(エージェント)は何か既に完成した形態として存在しているのではなく、むしろ変わるもの、変えうるもので自己増殖を繰り返すものであることをアンサルドゥーアは主張している。

Every increment of consciousness, every step forward is a travesia, a crossing. I am again an alien in new territory. And again, and again. But if I escape conscious awareness, escape "knowing," I won't be moving. Knowledge makes me more aware, it makes me more conscious. "Knowing" is painful because after "it" happens I can't stay in the same place and be comfortable. I am no longer the same person I was before.¹⁹

(意識を高めること、前進することは横断を意味している。私はまた新しい

土地で他者となる。繰り返し、繰り返し。しかし、もし私が意識的な目覚めを回避するならば、「知る」ことを放棄するならば、私は変わらないだろう。知は私を目覚めさせ、意識的にさせる。「知る」ことは辛いことである。なぜなら、知ってしまったら、私は同じところにいることはできないし、心地よく感じることもない。私はもう以前と同じ人間でいることはできない。)

アンサルドゥーアは「知る (knowing)」ことを通して主体は動き変換していくという。この「知る」という行為は自学自習をだけを意味しているのではなく、他者との関係性、相互的交流から学ぶことをも意味している。主体は異質性や多様性を認識し、変換と差異を通じて生産/再生産されていく。完成した固定的なアイデンティティを否定し、プロセスとしてのアイデンティティを主張することによって、アンサルドゥーアは二つのもの間にまたがる境界線を曖昧にしているのである。

境界線を曖昧にするという営みは、新しいタイプのアイデンティティを想起し、性/ジェンダー、人種、階級、性的指向などといった出自や体験の共通性ではない、新しい形の連帯が生まれる可能性を暗示する。リサ・ロウ (Lisa Lowe) は著書『イミグラント・アクト (*Immigrant Acts*)』の中で、「閉ざされた状態のものを見直すことによってわかったこと　さまざまな差異を隠蔽するよりも露にすることは、共通の諸特性を共有しているかぎり、ある特種な形態の支配に対して挑戦するために他のグループと連携する政治的ラインを開いているということである」²⁰ と語る。彼女が語るように、連帯とは何か新しいものが生じる可能性をもつ交流の場でなければならいはずだ。ある必然的な多様性、雑種性、複数性の認識によって差異を矛盾することなく、差異とともに、差異を通じて生きるアイデンティティは決してひとつではなく、多様な連帯の可能性を開く。さまざまな差異を違いとして孕みながら「私たち」というある主体が成立するとすれば、それは、私たちが支配的な権力構造に対する政治的課題の分有においてであり、女性であるとか、有色人種であるとかいった出自や体験の共通性に本質的に根ざしているのではないことをアンサルドゥーアの言説から読み取ることができる。

4. 語ることの意味

アンサルドゥーアは『ボーダーランド』で彼女自身がその一部であるチカノ (チカナ)・アメリカ人たちの社会、文化、さまざまな生の断面を描いているが、これから私が述べたいことは、リプレゼンテーション (表象 = 代理) の問題と関

連しているのだが、記述の主体が記述の対象と帰属を同じくするというだけでその社会の固有性を語ってしまう危険性についてであり、代弁する（speak for）すなわち他者に代わって語るものの問題性についてである。語られる者／語る者の不均衡な権力関係を乗り越えるスピヴァクの二つの提案を参照しながら、アンサルドゥーアがそれを実践している作家であることを明らかにすると同時に、なぜ彼女がリスクを冒しながらも語り続けるのかを考えていきたい。

「語られる」という立場と「語る」という立場の間には構造化された不均衡な力関係が存在する。語りは作家、評論家、演説家、ジャーナリストなどある権力を行使しえる人々によって遂行される。言葉を書き読むことができるという特権的位置にいる人々の経験に即して語りは構築されていく。一方、「語られる」側は自らの声を届ける術をもたない人々であり、情報を得ることからも伝えることから隔離された場所にいる。リュス・イリガライ（Luce Irigaray）は、西洋男性に特権を与えてきたロゴス中心主義は言葉を生み出す行為から女性を閉め出し、語る機能に関して女性に抑圧をかけ従属すべき地位に追いやってきたという²¹。イリガライの論を応用すれば、世界に向けて言葉を伝えることができる女性作家が「女の代わりに」「女のために」「女という名のもとに」語るということは抑圧的な態度であり、自らの声を届ける術をもたないサバルタンの存在の女性たちを占有し従属すべき位置に追いやり沈黙を強いることと同じなのではないだろうか。

アンサルドゥーアは『ボーダーランド』で不法移民としてアメリカ合衆国にやってくるメキシコ系女性の悲惨な状況や白人に土地を奪われた祖母の体験や差別と貧困の中で子供を育てたチカナ・アメリカンの母の被抑圧的な体験などを描き、言葉をもたない女性たちの私的な声、個人的な体験を物語ることで有色人種の女性の抑圧を表現しようとした。しかし、アメリカ合衆国の大学で教授として受け入れられるだけの教育や特殊技術／専門職をもち、英語を読み書くことを通して自己主張ができるアンサルドゥーアと、不法移民として国境を越え英語を読むことも書くことも話すこともできないメキシコ系女性と無条件に同じメキシコ系女性であるといえるだろうか。自らの声を届ける術をもたない移民の女性や貧困の中でアメリカ合衆国とメキシコの国境に生きる女性たちはさらなる被抑圧者であり、スピヴァクのいう「サバルタン」である。彼女たちの立場とアンサルドゥーア立場は決定的に違うのである。では、サバルタンの女性とアンサルドゥーアは分断されていて架橋することはできないのだろうか。私はそうではなくて、二人の間には分断があると、架橋されなければならない分断であると認識してこそ、その分断を乗り越えるための実践が模索されるのだと思う。スピヴァクは

『サバルタンは語ることができるのか (Can the Subaltern Speak?)』で、語られる者 / 語る者の不均衡な権力関係を乗り越えるために、学び知った知識人に特権を「忘れ去る (unlearn)」ことを呼びかけている²²。

『サバルタンは語ることができるのか』の訳を手がけた上村忠男は「学び知ったことをわざと忘れ去ってみる ことの試みは、そのままにまた 他者と間に倫理的関係性をとりむすぶ ことの開始を告げるものである」²³と指摘している。特権をわざと忘れ去ってみることは社会的な地位を放棄せよという意味ではなく、「もっと閉ざされた場所を占めている他者についてのなんらかの知識を獲得するために懸命になって勉強すること」、他者が「答えを返すことができるよう なしかたで、語りかけるよう試みるということ」を意味している²⁴。この二つの試みをアンサルドゥーアの『ボーダーランド』から読み取りたい。

マジョリティの文化からみれば、チカノ・アメリカンはヨーロッパ系アメリカ人とは異なった他者として構成される。しかし、チカノ・アメリカンからみれば自分たちは多種多様な存在なのである。たとえば、チカノ・アメリカンは男性であり女性であり、その起源はメキシコ、キューバ、プエルトリコ、コロンビア、アルゼンチンなどさまざまで、世代も異なっていて、合衆国生まれであったり移民であったり、英語が堪能であったり話せなかったり、エリートであったり労働者階級であったりする。チカノ・アメリカンの多様性について語るためには、自らの声を届ける術をもたない移民たち、つまりさらなる被抑圧者について学ばなければならない。それは、時として、痛みをともなう行為である。たとえば、アンサルドゥーアは、有色人種の女性だからといって被抑圧者でいつづけることはできないという。語る言葉をもちえないサバルタンの存在の母たちが抑圧に加担している現実を描くことはひどく痛みをともなう作業である。しかし、アンサルドゥーアは、抑圧の加担者としての女性を描くことによって、抑圧者と被抑圧者のヘゲモニックな構造を明らかにしようとしている。

Culture is made by those in power — men. Males make the rules and laws; women transmit them. How many times have I heard mothers and mother-in-law tell their sons to beat their wives for not obeying them, for being *hociconas* (big mouths), for being *callajeras* (going to visit and gossip with neighbors), for expecting their husbands to help with the rearing of children and the housework, for wanting to be something other than housewives? ²⁵

(文化は権力をもっている人間、つまり、男性によってつくられている。男性はルールや法律をつくり、女性はそれらを伝える。いったい何回私は母や

義母たちが息子に妻が夫の言うことをきかないとき、べらべらとおしゃべりをしているとき、隣人と噂話をしているとき、子供の面倒や家事を手伝ってくれるようにと夫に頼むとき、主婦以外のことをしたがるとき、妻をなぐるように言っているのを聞いたらどうか。)

文化的な支配が力や暴力によって達成されるのではなく、従属する人々の合意を通じて獲得される覇権構造　これをグラムシにならってヘゲモニーと呼んでもいいのだが　によって達成されているかを私たちは理解することができる。アンサルドゥーアは大声で叫んだり家父長制を批判しながら対岸にいただけでは不十分なのだという²⁶。それは人をつかまえてはおまえは抑圧者だ、あるいは被抑圧者だとレッテル貼りをしているにすぎない。アンサルドゥーアは対岸にだけいることの不可能性を示し、被抑圧者であると信じている女性たちは自分が受ける抑圧ばかりか、自らが加担している抑圧、差別を学ばなければならないことをアンサルドゥーアは教えてくれている。

スピヴァクの第二の提案　他者が応答できるようにするためには、他者が答えを返すことができるようになしたで、語りかけるよう試みることは言語との関係性から見る必要があるだろう。性/ジェンダー、世代、地域、階級、状況によってチカノ・アメリカンが使う言語は違い、アンサルドゥーアは自らが使用する8つの言語²⁷ (Standard English, Working class and slang English, Standard Spanish, Standard Mexican Spanish, North Mexican Spanish dialect, Chicano Spanish (Texas, New Mexico, Arizona and California have regional variations), Tex-Mex, *Pachuco* (called *calo*)) を紹介している。兄弟姉妹や友人と話すときはChicano SpanishやTex-Mexを用い、仕事ではStandard EnglishとWorking class Englishを使う。祖母と話すとき、スペイン文学を読むときは、Standard SpanishとStandard Mexican Spanishを使用する。そして、メキシコ系移民とはNorth Mexican Spanish dialectで話をする。以上のような彼女の言語背景を反映するように、彼女の作品群中ではさまざまな言語体が飛び交う。しかし、アンサルドゥーアは他者が使用する言語で語りかけて満足しているわけではない。他者と規定された人々は支配者の言説を内面化しているか、あるいは自らを不可視してしまっているため応答することが容易ではなく、共通の言語を使うだけで他者が応答できるようになるのは非常に困難である。したがって、作家は、まず初めに、消し去られた他者の存在、体験、文化、歴史を再構築し、他者に届けなければならないだろう。アンサルドゥーアはチカノ・アメリカンに伝わる様々な神話を用いて、歴史や文化の再構築を試みる。女神Coatlícuéの起源を遠く古代(A.D.800)のアステカ　メキシコの歴史や文化にまで

遡り、アステカ社会が始めは母権制であったこと、「花の戦い」という女性だけのお祭りがあったこと、多数の女神が存在していたことを描く。その後、征服者としてのスペイン人やローマ・カトリック教会の文化が持ち込まれたが、土着の文化と混合しながら創造物Coatlícuéを創り出していく歴史を振り返る。アンサルドゥーアは消し去られた女性たちの存在、体験、文化、歴史を再構築し、男性の仲介なしに女性たちに届けなければならないことの必要性を感じながら、歴史の再構築、文化的回復の行為を実践している。アンサルドゥーアは「さまざまな言語で語ること：第三世界女性作家への手紙 (Speaking In Tongues: A letter To 3rd World Women Writers)」で再構築することの意義を以下のように述べている。

I write to record what others erase when I speak, to rewrite the stories others have miswritten about me, about you. To become more intimate with myself and you. To discover myself, to preserve myself, to make myself, to achieve self-autonomy.²⁸
 (私が話している間に他者が消し去ってしまったことを記すために私は書く。私について、あなたについて、他者が書き間違えた物語を正すために書く。私とあなたがもっと親密になるために。私を見つけたすために、守るために、つくるために、自律をえるために。)

アンサルドゥーアが様々なリスクを負いながらも語り続ける理由は、隠蔽されている物語や抑圧者たちによって記述された物語を暴き再構築することを自らに課せられた第三世界女性知識人としての使命と考えているからである。「私」と「あなた」がもつ物語は同一のものとは限らないが、物語を共有・交換することによってお互いの状況を把握することができる。「私とあなたがもっと親密になる」ことは、多様な連帯の可能性を開くことをアンサルドゥーアは暗示している。語ることが力を与える行為である限り、彼女は何か新しい連帯を想起するために語り続けるであろう。

5. おわりに

最後に、アンサルドゥーアがフェミニズム理論に与えた貢献価値と、彼女が投げかけたメッセージを日本にいる私たちはどう受けとめることができるのか、以上二つのことをまとめてみたい。私は文学作品を読んでその中で描かれる差別的なメカニズムを認識するだけでは不十分であると考え。ここが性差別的言説であるとか、人種差別主義の痕跡があると指摘しているだけではあまり意味がない

のではないだろうか。支配者と被支配者のヘゲモニックな力関係を認め、それは架橋されなければならないものであると認識し、乗り越えるための実践を模索して初めて私は私の責任を果たすことになると思う。したがって、ボーダーランドを生きる人々の思いや記憶が時を越えて、空間を越えて、私たちに伝えられるとき、共起的な対話は成立しないにせよ、その意義を考えることは重要なことだと思われる。

アンサルドゥーアのフェミニズム理論への貢献価値は以下の三つに集約されるだろう。(1)「女」という単一的なアイデンティティを求めることをあきらめること、(2)差異を露にすることによって政治的ラインが模索される点、(3)被抑圧者の視点からばかりでなく、抑圧に加担している現実を学ぶこと。ハイフンつきのアメリカ人女性や第三世界出身の女性は、本質や純粋性によってではなく、ある必然的な異質性や多様性の認識によって構成されるアイデンティティの概念を発展させた。「女」という単一的同一的アイデンティティの追求をあきらめ、多様なアイデンティティ(アイデンティティズ)を認めることはより多くの他の被抑圧者たちとの連帯を可能にする。そのために、被抑圧者の体験や歴史の「発掘」は大変重要であり、埋もれたものは掘り起こしていかなければならない。しかし、自分たちが受ける被抑圧者としての体験や歴史は揺るぎのない絶対的なものであるという考えは捨てなくてはならない。アンサルドゥーアが述べるように、私たちは常時、被抑圧者でいつづけることはできないのだから。自らが抑圧に加担する現実を学ばなくてはならない。

以上のことは、アンサルドゥーアが読者に投げかけているメッセージとも重なっている。彼女のメッセージはアメリカにいる女性にだけでなく、遠くアフリカやアジア各国にいる女性にも届く。そして、当然のことながら、日本にいる私たち女性にも届くのである。彼女は私たちにポジショニングの問題性を投げかける。これまで「女性」という理由だけで家父長制の犠牲者としてアイデンティファイする傾向が強かった日本の女性たちでさえ、過去、現在を問わず日本のアジアにおける植民地主義に目をむけると、日本の女性が抑圧の加担者であることは逃れられない。また、男女雇用均等法を主張するとき、日本の国籍をもつ女性たちは自分たちの雇用環境を整えるのに必死で在日外国人女性やレズビアンの声に真剣に耳を傾けてきただろうか。抑圧の犠牲者であると同時に抑圧の加担者であることを自覚することは、新たな主体性を再構築することである。そして同一性としてのアイデンティティをあきらめることによって、支配構造に対する挑戦として政治的課題の分有において他の諸集団と連携する可能性を広げることができる。アンサルドゥーアの語りかけは日本にいる私たちに勇気をもって日本に在

住している女性の雑種混淆性を表現することを教えてくれている。

註

1. 鄭はwomen of colorの表記について以下のように語る。「women of colorを『有色女性』と訳してしまうと、意味するところが表現されないので、日本語に訳するのは困難とみて、原語のまま使用した。アンジェラ・デービス (Angela Y. Davis) もいっているように、women of colorとは生物学上の概念でも人種的アイデンティティでもなく、ある政治的課題を共有する女たちのコミュニティを指すポリティカル・アイデンティティなのである」(江原由美子、金井淑子編『フェミニズム』新曜社, 1997)と語る。私は鄭の見解に強く賛同するものであり、women of colorが彼女たちを取り巻くすべての抑圧(性差別、人種差別、階級差別、同性愛差別、世界資本主義など)と闘うポリティカルな意味をもつことから英語のまま記すことにする。
2. Mestizoとはインディアンとスペイン人の混血。
3. Gloria Anzaldua, *Borderland/La Frontera: The New Mestiza* (San Francisco, Aunt Lute Books, 1987), preface.
4. Ibid., p.3.
5. Ibid., pp.9-13.
6. ミカリフォルニア州で1994年に可決された住民提案で、共和党支持者を中心とする住民らが「税金を払わない不法移民が公的サービスを受けるのは不当」として提起した。この提案は賛成60%で可決されたが、その後「住民提案は基本的人権を侵害し、憲法違反」とする差し止め訴訟が相次いで起き、州を二分する論争になっていた。1999年7月30日に、5年越しの論争の末、廃案が決まった。
7. 移民を排斥する法律としては、1888年中国人移民排斥法、1905年日本人移民排斥法、1924年ヨーロッパ系移民排斥法がある。その他、アジア系は市民権をとれない、土地を買えないなどの不利益を被る法律や第二次世界大戦中は日系人を強制収容所に収監するなどの差別的な法律があった。
8. Gloria Anzaldua, *Borderland/La Frontera: The New Mestiza*, preface.
9. Ibid., p.3.
10. Anzaldua, "La Prieta", in eds. Cherrie Moraga and Gloria Anzaldua, *This Bridge Called My Back* (New York: Kitchen Table: Women of Color Press, 1981), p.209.
11. Simone de Beauvoir, *The Second Sex* and trans. H.M. Parshley (New York: Vintage, 1989), vii, x. [シモーヌ・ド・ボーヴォアール 生島遼一訳『第二の性』(人文書院, 1967)を参照]

12. Sojourner Truth, "Speech at Akron Women's Rights Convention, 1851" in eds. Angela G. Dorenkamp, John F. McClaymer etc., *Images of Women in American Popular Culture* (San Diego; Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1985), pp.11-12.
13. パーバラ・スミス「黒人フェミニスト批評に向けて」エレン・ショウウォーター編 青山誠子訳『新フェミニズム批評』(岩波書店, 1990), p.196.
14. ガヤトリ・C・スピヴァク、鈴木聡他訳『文化としての他者』(紀伊国屋書店、1990), p.68.
15. ジュディス・バトラー、竹村和子訳『ジェンダートラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(青土社, 1999), p.22.
16. Anzaldua, *Borderland/La Frontera: The New Mestiza*, p.19.
17. Anzaldua, "La Prieta", p.205.
18. Anzaldua, *Borderland/La Frontera: The New Mestiza*, p.74.
19. *Ibid.*, p.48.
20. Lisa Lowe, *Immigrant Acts: On Asian American Cultural Politics* (Durham: Duke University Press, 1997), p.70.
21. リュス・イリガライ 浜名優美訳『差異の文化のために』(法政大学出版局, 1993)を参照。
22. ガヤトリ・C・スピヴァク、上村忠男訳『サルタンは語るができるのか』(みすず書房, 1998), p.74.
23. *Ibid.*, p.140.
24. *Ibid.*, p.140.
25. Anzaldua, *Borderland/La Frontera: The New Mestiza*, p.16.
26. *Ibid.*, p.78.
27. *Ibid.*, p.55.
28. Anzaldua, "Speaking In Tongues: A letter To 3rd World Women Writers" in eds. Cherrie Moraga and Gloria Anzaldua, *This Bridge Called My Back* (New York: Kitchen Table: Women of Color Press, 1981), p.169.

参考文献

- Anzaldua, Gloria. *Borderland/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco: aunt lute books, 1987.
- , ed. *Making Face, Making Soul/ Haciendo Cara: Creative and Critical Perspectives by Feminists of Color*. San Francisco: aunt lute books, 1990.
- , and Cherrie Moraga, eds. *This Bridge Called My Back*. New York: Kitchen Table: Women of Color Press, 1981.

- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of the Identity*. New York: Routledge, 1990. [邦題 竹村和子訳 『ジェンダートラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社, 1999.]
- 江原由美子、金井淑子編 『フェミニズム』 新曜社, 1997
- Dorenkamp, Angela G., John F. McClaymer etc., eds. *Images of Women in American Popular Culture*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1985.
- Irigaray, Luce. *Je, Tu, Nous* Editions Grasset & Fasquelle, 1990. [邦題 浜名優美訳 『差異の文化のために』 法政大学出版, 1993.]
- 久米博 『現代フランス哲学』 新曜社, 1998.
- Lowe, Lisa. *Immigrant Acts: On Asian American Cultural Politics*. Durham: Duke University Press, 1997.
- Showalter, Elaine, ed. *The New Feminist Criticism*. New York: Pantheon, 1985. [邦題 青山誠子訳 『新フェミニズム批評』 岩波書店, 1990.]
- Simone de Beauvoir. *The Second Sex*. Translated by H.M. Parshley. New York: Vintage, 1989. [邦題 生島遼一訳 『第二の性』 人文書院, 1967.]
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Can the Subaltern Speak?: in Marxism and the Interpretation of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1988. [邦題 上村忠男訳 『サバルタンは語る事ができるのか』 みすず書房, 1998.]
- . *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. New York: Methuen, 1990. [邦題 鈴木聡他訳 『文化としての他者』 紀伊国屋書店、1990.]
- Trinh, T. Minh-ha. *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*. Bloomington: Indiana University Press, 1989. [邦題 竹村和子訳 『女性・ネイティブ・他者：ポストコロニアリズムとフェミニズム』 岩波書店, 1995.]

